

わが国の大学女子サッカーの現状および今後の展望： (一財) 全日本大学女子サッカー連盟の取り組みに着目して

○高藤 順 (吉備国際大学) 黒澤 尚 (仙台大学) 加藤 朋之 (山梨大学)

キーワード：大学女子サッカー，スポーツ組織，マネジメント，人材養成

1. 研究の背景と目的

(一財)全日本大学女子サッカー連盟(以下、JUWFA)は、サッカー女子日本代表選手(以下、なでしこジャパン)をはじめ、2021年開幕した日本女子プロサッカーリーグ(以下、WEリーグ)所属選手、日本女子サッカーリーグ(以下、なでしこリーグ)所属選手など多くの優秀な選手を輩出してきた。選手だけにとどまらず、審判員、指導者、マネジメントスタッフなど様々な立場から有益な人材を輩出している。

そこで本研究は、全日本大学女子サッカー連盟の取り組みを通じたこれまでの成果および現状の課題を明らかにするとともに、わが国の女子サッカー発展における大学女子サッカーの使命・役割を含めた今後の展望を検証することを目的とした。

2. わが国の大学女子サッカーの概要

わが国の大学女子サッカーは、1987年第1回全国大学女子サッカー大会が兵庫県神戸市において、兵庫県サッカー協会の協力を得て、関西女子サッカー連盟主催で開催された。1991年度(第5回大会)までは、各地域予選も実施することなくオープン参加だった。

参加チーム数の増加により、1992年度から(公財)日本サッカー協会(以下、JFA)主催による全日本大学女子サッカー選手権大会(以下、全日本女子インカレ)に大会名が変更され、各地域予選を勝ち抜いた16チームのトーナメント形式となった。

1995年には、大学女子サッカーを統括するJUWFAの前身である全日本大学女子サッカー連盟運営委員会が設立された。

また、2001年には関東地域の選手を中心とした東日本選抜と関西地域の選手を中心とした西日本選抜の東西対抗戦が開催され、2023年度は大学女子サッカー地域対抗戦として北海道から九州まで9地域の選抜選手による10チームで開催されている。

2007年JFAは日本女子サッカーの普及・強化・育成それぞれの面における発展を目的に「なでしこビジョン」を発表したが、同年JUWFAも一般財団法人として法人化され、正式にJFAの任意団体に加盟した。

3. 方法

JUWFA理事長をはじめ、理事、JFA女子委員長等大学女子サッカーに関わる21名にアンケート調査ならびにインタビュー調査を実施するとともに、JUWFA事務局に1987年度～2004年度の登録チーム数および2005年度～2023年度の登録チーム数・選手数、2024年現在のJFA公認審判員数などの資料を依頼した。

4. 結果および考察

① 成果

表1

(一財)全日本大学女子サッカー連盟加盟 チーム・選手数

年度	チーム数	選手数	年度	チーム数	選手数
1987	10		2006	56	1,072
1988	17		2007	59	1,165
1989	23		2008	64	1,272
1990	29		2009	69	1,355
1991	28		2010	72	1,438
1992	40		2011	73	1,471
1993			2012	75	1,568
1994			2013	82	1,620
1995			2014	89	1,756
1996	52		2015	89	1,840
1997	50		2016	87	1,961
1998	49		2017	87	2,021
1999	45		2018	86	2,106
2000	47		2019	84	2,039
2001	52		2020	84	2,038
2002	51		2021	85	2,140
2003	46		2022	87	2,221
2004	54		2023	88	2,152
2005	50	948			

※ 1993年～1995年はデータ不明のため無記入

JUWFA加盟チーム数・選手数ともに、年々増加している。(表1)選手の活躍としては、2011年なでしこジャパンがドイツワールドカップにおいて優勝した21名の登録メンバー中、学連出身者5名が出場した。さらに、翌年(2012年)ロンドンオリンピックでは、準優勝した18名の登録メンバー中、学連出身者4名が出場した。代表チームに活躍により、メディアに取り上げられることでサッカーを始めた女子選手が増えたが、その中でも大学進学しプレーをする選手も増加したと考えられる。

また、日本女子サッカーのトップリーグである WE リーグ所属クラブをはじめ、なでしこリーグ所属クラブに学連出身の数多くの選手が活躍している。クラブによっては、チーム最年長の選手をはじめ現役選手として選手生命の長い学連出身者や主将・副主将などチームの中心的存在で活躍している学連出身者も多い。

審判員については、2021 年日本プロサッカーリーグ史上初の女性主審で 2022 年 FIFA ワールドカップ史上初の女性主審のひとりである国際審判員・山下良美氏をはじめ、2024 年現在全国大会の主審を務める女子 1 級審判員 55 名中 21 名が学連出身者である。そのうち 11 名は、WE リーグ・なでしこリーグ担当審判員である。また、元女子 1 級審判員引退後、後進審判員の育成や指導に携わる 1 級インストラクターとして 7 名が活躍している。

さらに、監督・コーチ・教員等の指導者やトレーナー、マネジメントスタッフ等サッカーを「支える」立場についても、WE リーグ・なでしこリーグ・大学・高校・中学校・地域クラブなど様々なカテゴリーにおいて多数の学連出身者が幅広く活躍している。

このような人材養成の成果については全員が一致した回答であり、その要因は、女子サッカー部を強化クラブとして活動する大学の増加とともに専任の指導者が増え、インカレや地域対抗戦のレベルアップしたことが大きな要因であるが、指導者講習会・審判講習会・大会を通じた運営活動・強化活動・普及活動・広報活動等、JUWFA の様々な取り組みが繋がったと考えられる。

② 課題

JFA は「女子サッカーの発展なくして日本サッカーの発展なし」との考えから、「女子サッカーの活性化」に取り組んできた。しかしながら、サッカーを取り巻く環境面をはじめ様々な課題も明らかにされた。

特に大きな課題の大半は、「選手の経済的負担」「大学女子サッカーに関わる人材不足」「関東地域を中心としたチーム数の多い地域と他の地域との地域間格差」に集約された。

JFA 登録や JUWFA 加盟費、公式戦や練習試合にかかる交通費や宿泊費は、基本的に選手の個人負担であり年間を通じた活動における経済的負担は極めて大きいと考えられる。

人材不足については、JUWFA 加盟チーム数が増加しているとはいえ、日々の活動に関わる監督やコーチなど指導スタッフが充実しているチームの割合は全体的に少ない。また、日々の活動に携わる専任指導者の雇用形態も大学の教職員よりも年度ごとの契約である業務委託のスタッフが多いことも明らかにされた。

したがって、JUWFA 理事をはじめ各地域連盟の要職を担うことも困難な状況であると推察される。

地域間格差については、加盟チーム数が多い地域は年間を通してリーグ戦の開催も含め公式戦の試合数も確保されている。しかしながら、加盟チームの少ない地域の多くの理事からは、「インカレ予選もトーナメント形式で年間を通じた公式戦の場も少ない」という言葉が共通していた。

このような現状から選手の強化・育成の視点だけでなく、審判員・運営など人材養成における活動の機会においても格差が出ると考えられる。

その他、なでしこリーグ所属の 3 大学（日本体育大学、静岡産業大学、吉備国際大学）においては、スケジュールも含めなでしこリーグとインカレに向けたチームマネジメントの課題も明らかにされた。

やはりたくさんの方のサポートによってチームが支えられる中、なでしこリーグを優先せざるを得ないことは致し方ないことであると考えられる。

③ 今後の展望

わが国の少子化の進行とともに 18 歳人口も年々減少している現在、今後は JUWFA 加盟チーム数・登録選手数ともに減少すると推察される。現状においても、高校までサッカー部でプレーしていたが大学入学後はサッカー部に所属しない選手も存在している。

一方で、WE リーグの育成組織でプレーしていてトップチームに昇格できる能力を持ちながらトップチームの昇格を辞退し、資格取得を目的に大学進学し大学でプレーを継続することを選択する選手も存在する。

2019 年、ナポリユニバーシアードがサッカー競技の最後の大会となった。翌年からのコロナ禍で大学（学連）選抜の活動も中断した。しかし、今年度は（一財）全日本大学サッカー連盟（以下、JUFA）とタイアップして大学日韓（韓日）定期戦に参加が決定した。

高校生年代の女子選手にとって夢を与え、魅力のある大学女子サッカーにするためにも、さらに様々な取り組みにおいて JUFA や各地域学連との連携を図ることが重要であると考えられる。

5. 結論

本研究を通して、JUWFA の様々な取り組みの結果、連盟の目的のひとつである人材養成をはじめ数多くの成果が表れている反面、まだまだ様々な課題も多いことも明らかにされた。

しかしながら、わが国の女子サッカー発展において大学女子サッカーが人材養成をはじめいろいろな場面において「屋台骨を支える存在」として大きな役割を果たしていることも示唆された。